

変形性膝関節症－防已黄耆湯

文献

濃沼政美, 白神誠. 変形性膝関節症の保存的薬物療法に対する防已黄耆湯の薬剤経済分析. 医療薬学 2006; 32(8): 729-39.

1. リサーチクエスション (research question)

変形性膝関節症(K-OA)の患者の治療を目的とした、防已黄耆湯による治療の費用対効果を、NSAIDS 内服による治療を対照とした費用効果分析法により評価する。
分析の立場 : 支払者

2. 対象集団と介入 (interventions)

対象集団 : 2002年2月から2003年1月まで一次性 K-OA と診断され、かつ膝関節跳動で水腫が認められるなどの4つの基準をいずれも満たす患者 84名
介入群 : 1)漢方群 (防已黄耆湯) 31名
 2)洋漢併用群 (防已黄耆湯+NSAIDS) 33名
対照群 : NSAIDS 群 20名

3. セッティング (location/setting)

日本、詳細は不明

4. 方法 (methods)

- ・コスト : 直接医療コスト (2004年4月改訂の診療報酬点数表ならびに薬価基準を用い算出された医療費)。データ収集期間は8週間。
- ・アウトカム : 「K-OAの自覚症状の改善」という仮定されたエンドポイントへ到達した患者数 (割合)。データ収集期間は2002.2-2003.1。
- ・割引率 : 記載なし。

5. 結果 (results)

	コスト/1人 (JPY)			アウトカム	ICER
	診療・調剤費用	薬剤費	総費用	エンドポイント到達割合	(円/人)
漢方群	6,860	5,197	12,057	54.8%	5,250
洋漢併用群	8,460	10,142	18,602	63.6%	49,978
NSAIDSのみ群	6,860	4,945	11,805	50.0%	-

- ・ベースライン分析でも感度分析でも、エンドポイント到達1例を得るため必要な治療費は漢方群・NSAIDS群・洋漢併用群の順に高くなる傾向が見られた。

6. 著者の結論 (authors' conclusions)

- ・水腫を伴う K-OA 患者に対し費用対効果に優れた治療を実施するには、原則として漢方薬である防已黄耆湯を単独で使用し、さらに高い改善効果を期待する場合に関しては疼痛時に NSAIDS を頓服するなどの治療法が推奨できる。

7. Abstractor のコメント

- ・本研究は2004年に公表された K-OA に対する防已黄耆湯の効果に関する臨床試験のデータに基づき、防已黄耆湯の費用対効果について secondary analysis を行った。
- ・各群のエンドポイント到達割合について統計検定の結果が報告されておらず、アウトカムに有意差があることを前提とした増分分析の結果と ICER に疑問が残る。
- ・感度分析は単純な費用効果比 CER についてのみ行われており、増分費用効果比 ICER については分析されていない。意思決定により重要なのはむしろ ICER であり、ICER に関する感度分析の実施が望まれる。

8. Abstractor and date (唐/五十嵐 2012.3.5)